一方北畠軍の来征を知った尊氏は、足利方の奥州官領斯波家長に来援を命じる。そこで家長は、相馬重胤、親胤父子を含む奥州の足利軍を率い、北畠軍の後を追って西上する。

留守の小高の堀内城には、重胤公の次子光胤公が、兄親胤公の嫡子松鶴丸（十三才）を擁して守備していた。

遠征した北畠軍は、翌年二月足利軍を大破し、尊氏は九州に逃走する。かくして顕家卿は鎮守府将軍に任ぜられ、翌三月奥州へ帰還の途につく。その途中で鎌倉に拠る斯波軍を攻撃して壊滅的打撃を与え、ために相馬重胤公らは自刃して果てる。更に宇都宮から東海道に出た北畠軍は、同年五月二十四日小高城を攻撃したため、守備する光胤公ら一族郎党約千名が討ち死にした。

但し松鶴丸は金谷の釘野山に脱出して無事であった。

この相馬・標葉両軍主力が西上した留守において、標葉隆光公は顕家卿の留守を預かる廣橋経泰卿に属し、同年三月二十二日相馬氏の堀内城を攻め、また同月二十七日、足利の将大泉平九郎に率いられた相馬光胤公らは、標葉氏の請戸城を攻撃するなど、攻防戦が繰り返されていた。このような時代背景の中にあって、この地で展開された地方戦の一つが、大悲山大蛇伝説の素材であったものと考えられる。

二、大悲山大蛇物語に登場する主要人物

伝説に登場する主要人物は、小高郷吉奈村に住む玉都坊。大蛇が化けた若侍、女人に化身した観音菩薩。大蛇を退治する相馬光胤公の四名である。

(一)、玉都坊（玉市とも記す）

この玉都坊については、現長野県北佐久郡軽井沢町の人、または山形市山寺立石寺の小僧、或いは旧行方郡領主行方五郎隆行公八代の裔、胤勝公と伝えられているが、後者が尤も大蛇伝説の内容にふさわしいので、胤勝公を玉都坊